

研修会報告

AIは敵？味方？スマート保育の始め方

野田 洋一郎（東京17期）



浅野公介先生

厳しい寒さが身に染みる「大寒」の空の2026年1月31日、閑静な住宅街に佇むフロンティアキッズ加賀町にて、上智・東京モンテッソーリ教員養成コース同窓会の研修会が開催されました。

今回のテーマは「AIは敵？味方？スマート保育の始め方」。

「AI（人工知能）」という、どこか冷たく無機質にも聞こえる言葉に、少しばかりの緊張と「私たちの仕事が奪われるのではないか」という漠然とした不安を感じながら会場へ足を運びました。しかし、講師にお迎えした同園系列の保育士である浅野公介先生の温かな語り口によって、その不安はすぐに「好奇心」へと変わっていきました。

講義の冒頭、先生は「AIに代替されやすい仕事・されにくい仕事」について触れ、私たちの保育士という仕事を持つ価値を改めて定義してくださいました。

保育士の仕事は、子どもたちへの深い共感、創造性、そして何より複雑な心の通い合いや倫理的な判断が求められる、極めてクリエイティブな職業です。そのため、AIに取って代わられることのない、人間ならではの尊い仕事なのだと再認識しました。

この言葉に、会場にいた誰もが深く頷き、勇気づけられたように思います。しかし、その尊い専門性を守るための「事務作業」や「文書作成」といった膨大な業務が、現場の大きな負担となり、時には保育者の心身を疲弊させているのもまた事実です。

そこで、先生が提唱されたのが「スマート保育」という考え方でした。AIが得意な「事務」や「アイデア出し」を道具として任せることで、保育者がゆとりを持ち、本来の目的である「子どもと向き合う時

間」や「保育の質の確保」を創出する、これこそが、AI導入の真の目的なのだとのお話がありました。

では、私たちはこの未知の道具と、どのように付き合っていけばよいのでしょうか。先生は、AIを活用する上で欠かせない「AIリテラシー（正しく怖がり、正しく使う力）」について、具体的な事例を交えて教えてくださいました。

一つ目は、偽造された人の写真や動画（ディープフェイク）、もっともらしい嘘（ハルシネーション）に注意する。AIは時として、事実に基づかない情報を自信満々に回答することがあります（存在しない温泉地を教える、など）。だからこそ、最後は必ず人間の目によるファクトチェックが欠かせません。

二つ目は、プライバシーを守る鉄則。チャットツールに入力した情報は学習データとして使われる可能性があります。園児の実名や住所は絶対に入力せず、「Aちゃん」「都内の保育園」のように抽象化して伝えること。これが子どもたちを守るための絶対的なルールです。フロンティアキッズでは、AI使用時の規則を作成し職員間で徹底しているようでした。

三つ目は、「AIは考えを広げる道具」であることを忘れないこと。AIはなんとなくみんなが考えている「暗黙知」を誰が見てもわかりやすい「形式知」に変換してくれたり、抜け漏れの防止や新しい視点を教えてくれたりするものですが、あくまで「答えを出すのは自分！」という視点を忘れてはいけないという話で、非常にハッとさせられました。

こうした「約束事」をしっかりと理解した上で、いよいよ研修は実践編のワークショップへと移りました。今回はChatGPTやGeminiといった生成AIを実際に触り、思考を整理するための「壁打ち相手」として活用する体験をしました。

特に印象的だったのは、「役割を指定して相談する」という手法です。「園長、ベテラン保育士、若手保育士、保護者、子ども、それぞれの視点で」と

AIに役割を与えることで、自分一人では気づけなかった多角的な視点からの助言が得られました。

参加者の皆さんが実際にAIと対話した事例も、非常に興味深いものでした。

事例：新入園児の不安対策「新入園児が不安になる要素」を尋ねたところ、愛着理論などの学術的根拠に基づいた回答が返ってきました。私たちが経験則で知っていることがきちんと言語化されることで、保護者への説明がスムーズになり、職員間の共有も深まるという利点を確認しました。

事例：行事の企画（職員新年会）ターゲット層（30～50代女性など）に合わせた景品選びや、「内輪ノリを避ける」といった配慮の行き届いた提案には、AIの意外なほどの「気配り力」に驚かされました。

一方で、失敗事例もまた大きな学びとなりました。教材用に恐竜（スピノサウルス）の線画を描かせたところ、指の数や鼻の位置がおかしい……という生物学的に不正確な画像が生成されてしまったのです。「あ、やっぱり最後は人間が見なきゃダメなんだ」と会場が笑いに包まれた瞬間でしたが、AIの限界を

知り、人間の「本物を見極める目」の大切さを痛感した出来事でもありました。

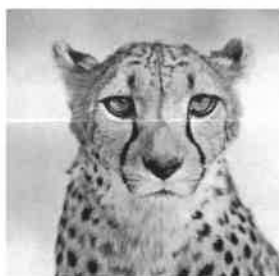
研修の締めくくりに共有された先生の言葉が、今も心に残っています。

「AIが進化する時代だからこそ、モンテッソーリ教育が大切にする『手仕事』や『人間同士の関わり』の価値が、より一層増していく」

AIはあくまで私たちの歩みを支える「道具」です。その利便性を賢く取り入れながら、最後は人間の目と心で判断し、子どもたちの成長を見守っていく。デジタルの力で余裕を生み出し、その余裕をアナログな「温かい手のぬくもり」として子どもたちに還していく、そんな「スマート保育」の未来に、大きな勇気をもらえた一日となりました。

研修後は、会場となったフロンティアキッズの施設を見学させていただき、AI活用と並行して、実際の保育環境設定についても学びを深める充実した時間を過ごしました。

未知のツールを恐れるのではなく、賢く使いこなしながら、私たち自身の人間力も高めていく。そんな新しい保育の扉を開くきっかけをいただいたことに、心から感謝いたします。



AIはどちらでしょう



記録・準備の負担を減らす実践講座

園紹介

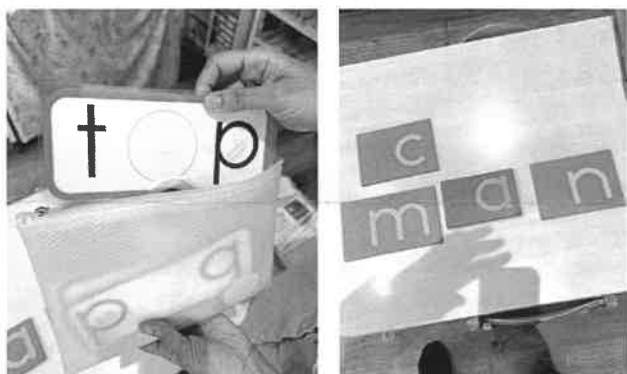
フロンティアキッズ

フロンティアキッズは株式会社フューチャーフロンティアーズが運営する各施設の総称であり、都内に認可保育所6園、企業主導型保育所2園、認可外保育所1園、学童3施設、児童発達支援施設1施設を展開している。

基本的にモンテッソーリ教育をベースとした保育方針を中心としつつ、他にもグローバル教育、SDGs教育、アクティブラーニングや食育にも力を入れている。また様々な心理学的アプローチを実践しながら、全ての子どもの自発性・主体性が発揮できるように、モンテッソーリ教育教員資格者、保育士、外国人教師などを適切に配置し、子どもの発達・成長に合わせたモンテッソーリ教具を整備し、子どもにとって最適な環境になるように努めている。

全系列園がそれぞれ特色や個性を備えているものの、ここからはその中でも別格級に“フロンティアキッズらしさ”を全任されていると言って過言ではないFrontierkids Global Schoolを紹介したい。

外国人教師が多く配置されており、日常の保育も外国人教師が中心に展開し、日々のコミュニケーションは英語でなされ、ひいてはモンテッソーリ教具も英語である。(写真参考)



モンテッソーリ教育が英才教育だと言われてしまうことに懸念のある方々は多いはずだが、決してこれらは英才教育を目指しているものではない。(ニーズがあるのは事実であるが)理由は以下の通りである。

「英語力」

グローバル社会において英語は一般教養であり、高い英語力は人的基礎力を向上させると同時に自信を深めることに繋がる。

「多様性を受け入れる力」

異文化、肌の色の違い、個性、多様な価値観を自然に受け入れる力は、非認知能力を育むことにつながると思っている。

その一方で、多様性を受け入れるためには、自己・自国のアイデンティティを確立することが同時に必要となるため、日本文化や正しい日本語の学びは欠かせないために、日本人教師も適切に配置されている。

また、モンテッソーリ教育では子どもの興味や発達に応じて手作り教具が整備されることが多いものであるが、往々にして抽象物に限られるところが多いのも事実である。ところがフロンティアキッズでは職人肌な職員がいることにより、手作りの具体物が登場する。

こういったところもフロンティアキッズの独自性であり、魅力であるように思う。



フロンティアキッズはこれからも世界情勢やニーズを真摯に受け止めながら、子ども達のこれからの生きる力や幸せに繋がっていく保育を目指して進化を続けていく所存である。

名称：株式会社フューチャーフロンティアーズ
(フロンティアキッズ本部)

住所：〒162-0062

東京都新宿区市谷加賀町 2-4-27-3F

TEL&FAX : 03-5579-8155

HP : <https://www.futurefrontiers.co.jp>

フロンティアキッズ曙橋分園 主任
浅野 公介 (東京14期)